



特集

ものづくりの魅力に迫る

とよはしの

匠

市では、ものづくりの技能者やその職業の重要性を広く知ってもらうとともに、技能を次世代に伝え、優れた人材を育成するため、卓越した技能を持つ方を「とよはしの匠」に認定・顕彰しています。

今回は、「とよはしの匠」に認定された2人の技能と、目標に向かって腕を磨く青年たちの想いに触れ、ものづくりの魅力に迫ります。

問合せ 商工業振興課(☎51・2435) HP 9149

## 建具・指物細工の匠

松井 美喜夫さん (63)



### 【経歴】

工業高校を卒業後、父親の経営する松井建具店に入店して以来、一貫して木製家具・建具製造に従事。昭和62年から平成12年まで、訓練施設である豊橋高等技術専門学校で講師を務め、次世代の育成を担う。

豊富な経験と卓越した技能が評価され、平成26年に「とよはしの匠」に認定。平成27年に「あいちの名工」、令和元年に厚生労働省の「現代の名工」に表彰され、令和3年には「黄綬褒章」を受章。

## 卓越した技能 — 独創の組子 —

組子とは、釘を使わずに木を幾何学的な文様に組み上げる伝統技法です。文様の元になる木片の大きさはわずか1cm程度。その木片を組み上げるには0.1mmの誤差も許されないため、木目の流れなどを見抜き、カンナで紙1枚の厚さにも満たないほどの微調整を施します。

組子の文様は直線を組み合わせたものが基本ですが、松井さんは直線と曲線を複雑に組み合わせ、高度なデザインを施した組子を作ります。これを可能にしているのが、松井さんが得意とする「職

人技と現代技術」の融合です。より精密にデザインするため、設計ソフトCADを使用して図面を作成し、レーザーなどを使って木材を加工することで、これまでの技術では表現できなかった文様を生み出します。これら現代技術で作成した曲線表現された文様を、伝統的な直線の文様に組み込むには、長年の経験により培った松井さんの緻密な職人技が欠かせません。斬新な発想と、それを実現させる圧倒的な技能によって、独創的な組子建具が完成します。

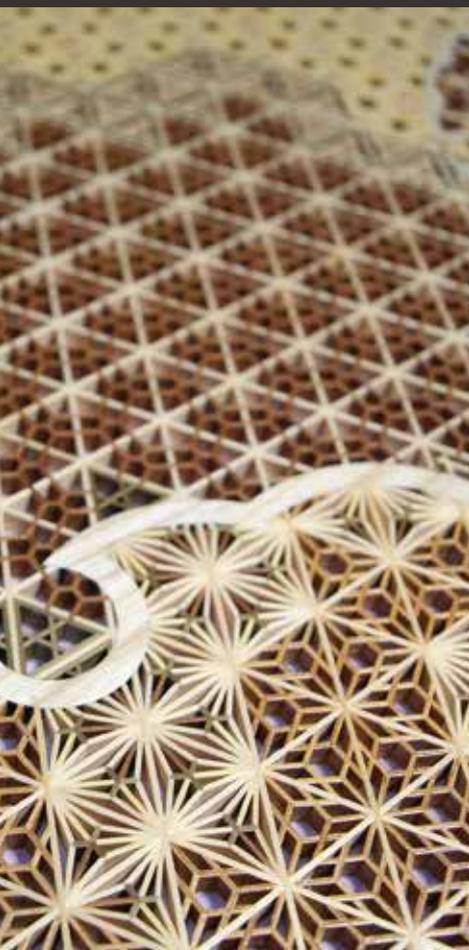
## 匠に聞く 仕事への想い

— 仕事の楽しさをどう感じてるか

打合せから製作・取り付けまで一貫してこなしている私にとっては、お客様の好みをどのように感じ取り、喜んでいただける作品を提供できるかが、この仕事の難しいところであり醍醐味でもあります。当然、お客様によって違う物語が生まれます。その都度想いを巡らせ、さまざまな作品をこの世に生み出せたことも一つの喜びです。私の仕事によって誰かが「笑顔」になるなんて、こんなに幸せなことはありません。

— 組子の発展について

今、組子そのものを知らない人が増えています。組子を普及させるには、まず組子を知ってもらい、興味を持ってもらえるような環境を整えなければなりません。そのためには、より組子を手軽に感じてもらうことが必要だと考えています。気軽に楽しめる雑貨を販売したり、ワークショップで組子を体験できる場を用意したりするなど、これからも組子の普及と発展に力を注ぎます。



▲ワークショップ用に作成した組子体験キット

# 精密金型の匠 楠本 好行さん (71)



## 【経歴】

株式会社 三光製作所に入社してから55年に渡り、精密金型の製作に従事。卓越した技能と後進の育成への貢献が評価され、平成28年に「とよはしの匠」に認定。平成29年に「あいちの名工」、令和3年には厚生労働省の「現代の名工」として表彰される。現在は会社の技能顧問として活躍。

## 卓越した技能 — ミクロの技 —

精密金型は、非常に微細な部品を製作するための金型のことです。薄い金属板などの材料を金型にあて、圧力をかけて一つの部品に加工します。でき上がった部品は、主にカメラや自動車などの精密機器に使用されます。部品の完成度は金型の精度によって決まるため、ときに顕微鏡で手元を覗きながら金型の微調整を行います。

完成した金型は、設計図に対して通常50マイクロメートル(50/1000mm)の誤差まで許されますが、楠本さんは、その誤差を0.5マイクロメートル(0.5/1000mm)まで突き詰めます。その精度は、金型を手作業で研磨することで培

われた手の感覚と、長年の経験により実現されます。これまで量産が難しかった微細な部品は、楠本さんが設計・製作した金型により、量産が可能になりました。また、発注元からの金型設計図に手を加え、より優れた部品を提供できるように改良しています。例えばカメラの中で使われる微細な部品は、楠本さんの提案で0.1〜0.15mmの切れ目を加えたことにより、部品を組み立てた際の接触不良を起しにくくしました。精密金型による部品の量産だけでなく、品質の向上まで図れる知識と技能は、まさに機械を超越した職人技が成せるものだと言えます。



## 匠に聞く 仕事への想い

### — ミクロの世界でのこだわり

金型の製作では、いかに設計図の寸法に近づけられるのかを、ミクロの世界で突き詰め、自分自身の限界に挑戦してきました。入社した当初は失敗も多く、ときには辞めたくなることもありましたが、諦めずに1から作り直し、完成させたときは嬉しかったです。

### — 若手へのメッセージ

デジタル技術で簡単に物を作ることができる時代になりましたが、良いものを仕上げる最後の決め手となるのは、勘と経験による人の手での調整だと思います。若い頃からたくさんの成功と失敗を経験し、手で覚えて身体に染み込ませてください。

# 匠の原石

## —未来ある若者たち—

これまで紹介してきた匠の卓越した技能は、最初から身に付いていたものではありません。ここでは、若くして匠の下で働くことを決意し、将来の夢へと進む青年と、市の「高校生技術アイデア賞」を受賞した高校生を紹介し、現在の道へ進んだ経緯や、ものづくりに対する想いを聞きました。

中学校を卒業後、大工になるという将来の夢を叶えるため、職業訓練校に進学。実務訓練で「とよはしの匠」である望月成高さんに指導を受けるうちに、望月さんの仕事に対する想いや姿勢、技術に憧れ、一度は断られても頼み込み、弟子入りしました。「体力も器用さも必要な大工を、自分がやっていたいけるか不安もあったけど、動き出さないと何も始まらない。親方のような大工を目指し、日々研さんを積み重ねています。」



とよはしの匠の弟子  
大工 元川 研人 さん  
(18)

幼い頃からものづくりに興味があった2人は、工科高校に進学。溶接や設計などを学んだ3年間で「できることが増えていくのが楽しかった」と振り返ります。学校生活の中で感じていた「サンダルが脱げやすい」という不満を解決しようと、独自のサンダルを共同で開発・製作しました。「授業の中で不採用になっても、アイデアを出し続けたことで作品が完成した。この気持ちを忘れずに、これからもものづくりに関わっていききたい」と、語りました。



高校生技術アイデア賞受賞  
松下 快笙さん(18) & 齋藤 壮さん(18)

匠たちが活躍する一方で、豊橋の産業は、職人の後継者不足など深刻な問題をいくつも抱えています。これらを解決するひとつの足掛かりが、「知ること」です。今回紹介した技能のほかにも、ものづくりは伝統ある歴史を守りつつ、進化を続けています。今回の特集を通じて「豊橋のものづくり」の魅力を知り、ものづくりについて考えるきっかけにしてみませんか。